

# 平和ガイドは成長の糧

宇根悦子

（平和ガイド）

県内でさまざまな平和活動を行っている平和ガイドの宇根悦子（うね・えつこ）さんに執筆いただいた。平和ガイドの起こり、平和ガイドになったきっかけ、ガイドを通じて広がる世代や地域を越えたつながり、自身の活動の基礎となっている愛情の尊さについて筆を取られた宇根さんは、昨年6月29日に沖縄平和祈念堂で開かれた寺島尚彦ファミリーの「さとうきび畑コンサート」の事務局を担当し、コンサートの成功に尽力された。

## 平和ガイド誕生の背景

沖縄には観光ガイドとは別に平和ガイドと呼ばれる人たちがいる。戦跡・基地を案内し、戦争と平和について考えていただく、という活動をしている人たちだ。私もその中の一人だ。

沖縄県は去る大戦で地上戦を体験した。戦後も広大な米軍基地が置かれ、否応無く戦争と関わりを持たされてきた。そのような歴史的背景から平和ガイドなるものが誕生した。

戦跡・基地案内の始まりは『沖縄県史 沖縄戦記録』（1971年、琉球政府発行）の編集員から始まったといえよう。安仁屋政昭、石原昌家、大城将保他、各編集委員は沖縄戦記録を編集するため、沖縄戦体験者の聞き取りを開始した。それまで知られていた沖縄戦は軍人の視点から見たものであった。聞き取りを進めていくにしたがって、国家の名の下に住民がどのように戦争に巻き込まれ、どのように死に至ったのか、そして郷土がどのように破壊されていったのか、その実態が明らかにされていった。

日本復帰後の1974年、全国歴史教育者協議会沖縄大会が開催されることになった。全国から歴史教育者・研究者が来県すれば会議ついでに観光バスに乗ることになる。そこで、安仁屋氏は観光バスに乗ってみた。

当時の観光バスのガイドシナリオは軍人賛美の視点から語られており、そこには住民の視点が欠落していた。それでは沖縄戦の実相は伝わらない。そこで、大会の際には県史編集委員を中心に、にわかガイドが案内役を勤めることになった。編集委員によって語られる沖縄戦の実相は全国から集まった教員・研究者を驚愕させた。それが高く評価され、本土からの労働組合や政党関係、修学旅行に対しても同様の案内をしてほしいという依頼が来るようになった。

しかし、案内人は大学教員や公務員、依頼のすべてに応えることは困難であった。そこで、市民団体や労働組合が独自で学習を重ね案内をするようになっていった。それでも需要に応えることはできなかった。

1986年、個人でもガイドブックを手に戦跡・基地めぐりができるように、と『歩くみる考える沖縄』（沖縄時事出版）が発行された。さらに案内人を養成しようと執筆・高教組南部支部を中心にした「戦跡・基地ガイド養成講座」が実施された。

その動きはさらに広がりを見せ、沖縄戦50回忌（1995年）を迎えるあたりから、那覇市、豊見城市、北中城村、糸満市、読谷村、県というように、行政主体のガイド養成講座も開かれるようになっていった。

戦跡・基地ガイド誕生当初は、軍人賛美のシナリオで案内する観光バスガイドと、住民の立場から案内す

る戦跡・基地ガイドと明確に立場が違っていたため、トラブルもしばしば発生した。観光バスのシナリオが軍人賛美となっていたのは、顧客が沖縄戦で肉親を失った遺族が主流であったためであった。遺族は、必然的に激戦地の南部を廻ることになる。軍人の遺族に対してのガイドは軍人賛美のシナリオに傾いていった。そのシナリオに住民の視点は欠落していた。当初、戦跡・基地ガイドは反戦ガイドと呼ばれた。しかし、その呼び方には過激なイメージが付きまとう。次第に平和ガイドと呼ばれるようになり、現在は後者の呼び方が定着している。

## 平和ガイド派遣事業

そのように誕生した平和ガイドも、その後さらに広がりを見せ、現在は主に3つの団体がガイドを派遣している。

### (1) 沖縄平和ネットワーク

1994年10月10日結成。県都那覇市が壊滅的打撃を受けた「10・10空襲」にちなんでその日に結成された。平和ガイド派遣の草分け的存在である。1986年から87年にかけて開かれた「戦跡・基地ガイド養成講座」の主催者や受講者によって構成された「平和ガイドの会」がその前身。「平和ガイドの会」は会則を持たない任意の団体であったため、活動の幅をさらに広げること、要請や声明を出していくためには、正式な会が必要と考えての発足であった。また、これまで個別に受けていたガイド依頼の窓口を一本化したいというのも会結成のねらいであった。代表世話人、安仁屋政昭、大城将保、石原昌家、吉浜忍、大城保英、村上有慶でスタートした。(連絡先：〒902-0061 沖縄県那覇市古島1-14-6 教育福祉会館406, TEL 098-886-1215, FAX 098-882-2777)

### (2) 那覇市の平和ガイド

1995年、那覇市の職員が平和ガイドをするという全国でも例のない活動がスタートした。市の職員を派遣するということで、時間は午前9時から午後5時の勤務時間内、依頼者は那覇市内に宿泊していること、市内に本社を置いている観光バス会社に限ることなど、ガイド派遣にはいくつかの制約がある。スタート時は乗車ガイドも実施していたが、現在はガマ<sup>\*</sup>のみとな

っている。当初、那覇市平和と国際交流室が対応していたが、現在は経済環境部観光課に移行、平和事業から観光事業へと様変わりした。

\* ガマ：自然洞窟。沖縄戦で避難壕、病院壕、陣地壕に使用された。

(連絡先：〒900-8585 沖縄県那覇市泉崎1-1-1 那覇市経済環境部観光課, TEL 098-862-3276, FAX 098-862-1580, <http://www.naha.okinawa.jp/heiwa/gaid/gaid3.htm>)

### (3) 沖縄県観光ボランティアガイド友の会

年々増加する沖縄修学旅行に対応するため、沖縄県観光コンベンションビューローはボランティアガイド養成講座を実施した。カリキュラムの8割以上を受講した者に終了証が与えられ、受講者を中心に1997年、「沖縄県観光ボランティアガイド友の会」が結成された。会では戦跡・基地に限らず、観光地も案内する。乗車ガイドも可能。(連絡先：〒901-0241, 豊見城市豊見城236, TEL 098-856-6441)

## 沖縄の歴史を知り平和ガイドに

高校卒業後、私は精神科の医療事務の仕事をしてながら看護学校を卒業し、看護婦をしながら大学に通った。大学を卒業したとき、もっと学びたいという気持ちが強くなっていた。そこで、かつて旅行したスペインに留学しようか、それとも沖縄の歴史を勉強しようか迷っていた。ちょうどその時、高教組南部支部が主催する「戦跡・基地ガイド養成講座」(1986年)の新聞広告が目に入り飛び込んできた。沖縄の歴史で沖縄戦は避けて通れない大きな出来事、沖縄戦から勉強を始めてもいいのではないかと、思い受講することにした。動機は歴史の学習であり、ガイドすることではなかったが、衝撃的な講座の内容は私の気持ちを変えていった。沖縄が地上戦になったわけ、他国の軍隊・米軍基地が置かれているわけが、講座を通して理解できるようになっていった。ガイドなど私にはできないと思っていたが、講座終了後は何らかの方法で伝える活動を始めなければならないのでは、という気持ちになっていた。

講座終了後の初めてのガイドは、戦後沖縄の米軍による強制土地収収について話すことだった。そのため20枚の原稿を書いた。いざ、案内に立った時、頭の中は真っ白でただ原稿を読むだけでせいっぱいだった。

た。こうして始まったガイドも、回を重ねるたびに自信のようなものがついてきた。

ガイド活動は一見、一方的に相手に与えるものと考えがちである。しかし、私にとってそれは自分自身の内面に語りかけることでもあった。振り返るとそれが私自身の成長へとつながったと思う。そのことに気づいたのは4年ほど経った頃であった。活動を始めた頃は過激な政治的活動をしているようで、長続きはしないような気がしていた。経済的問題も伴って、ガイドを続けるか他の方向へ進むか、何度も岐路に立たされた。しかし、今日まで活動は続いている。それは、他の活動では実感できない充実感があるからなのだろう。

### 引き継がれる歴史

現在、私は先にあげたいずれの団体にも所属せず、フリーで活動している。最近では平和ガイド活動が楽しくなってきた。活動を通して次世代への継承が着実にできていると実感できるからだ。共に戦跡・基地巡りをし、平和活動をした次世代の若者達が形を変えてさまざまな取組みを展開している。

4年ほど前、与勝中学校の子どもたちと戦跡フィールドワークをした。その時の子どもたちが与勝高校へ進学し、2年前の大晦日、浜比嘉島のサンライズホテルでアフガン支援のチャリティー公演を実施し、集めた資金をペシャワール会の中村哲医師に渡した。別な場所で再会した時も子供たちは元気に声をかけてくる。昨年1月には、私が企画担当した平和講座を受講した高校生たちが中村哲医師講演会の実行委員会で重要な役割をいくつもこなしてくれた。そして、昨年3月、阿波根昌鴻資料調査会のコーディネーターを私が務めた時も、共に戦跡・基地巡りをした埼玉大学、法政大学、津田塾大学の学生達が10人も参加してくれた。また、私が提供した情報を元に勝連町の組み踊り「肝高の阿麻和利」の活動を調査した埼玉大学の学生の努力によって、今年7月には埼玉公演が実施されることになった。世代を越え、地域を越えるつながりは私に夢と希望と幸せを実感させてくれる。

### 希望

平和ガイド活動を通して学んだことの一つに「戦争

のからくり」がある。戦争は自然災害のように止めることができないままに発生するわけではないということ。憎しみや差別をあまり、戦争になっても仕方ないという考えを浸透させ、火蓋を切る。周到に用意して戦争を始めるのだ。過去の戦争はいずれもがそのようにして引き起こされてきた。そこでは相手に対する思いやり（愛情）はまるで欠落している。この世に生まれたからには誰でも平等に生きる権利があるはずだ。にもかかわらず差別がつくりだされる。アメリカのブッシュ大統領が「悪の枢軸」と名指ししている国々にも私たちと同じ人間が生活している。それでも、攻撃するとブッシュ大統領は断言する。そこには、「自国の利益のみを追求」するアメリカとアメリカに追従する国々（日本も含む）がいる。そのような考えが通用していること自体不幸なことだと思う。

戦争を実践する軍隊、その構成員である兵隊という存在がいる。兵隊はだれも不幸だと思う。差別や憎しみ、命を含め現存するあらゆる事象を破壊することを軍隊の中で学び、その結果として戦争ができる人間が作り出されるからだ。そこでは、与える愛、受け止める愛、いずれも否定することを体得する。自由を守る、民主主義を守る、国を守るという大義名分のために結果的に一番大事な自分自身の愛を失う。そのことが最も不幸だと思う。

戦争の目的の一つに経済的利益がある。経済的に優位に立つため命もかえりみず、地球の痛みもかえりみず戦争が引き起こされる。そのことも突き詰めれば愛情の欠落と思う。失うことがあまりにも大きいにもかかわらず、経済的利益が優先されるのはなぜなのだろう。

経済的利益と愛情は水と油の関係かもしれない。経済の発展と反比例して愛情が失われていくように感じる。経済的利益と愛情、一見まったく異質のように思えるが、その延長線に戦争があると私は考える。経済的利益ではなく愛情が優先される時代が来たとき、世界は平和に近づくことができるのではなからうか。残念ながら、現在はまだまだ経済が優先されている。

だからといって悲観しているわけではない。個人的には身近でできることから始めようと思っている。まずは、身近にいる次世代を愛情をもって育て支えること。国内外を問わずその範囲を広げていくこと、それが私の役目と思う今日この頃である。